大西博君のこと

学部卒業後の大学院の研究室が技法材料に決まり、学部入試の監督補助をしていた時、同じ監督補助の大西君の同級生の女性から「赤木君、大学院、技材なんだって、じゃあ、大西君って知ってる？」と訊かれて、何となく聞いた事が有るなぁ、とは思ったのですが、その時は、その前年に卒業制作展で大橋賞をとって買い上げになっていた作品の作者だとは気づいてはいなかったので、「会った事ないと思うけど、それがどうしたの。どうして？」と単純に答えました。「会ったら一目で分かるけど、、気をつけないと、多分、、赤木君みたいなタイプ、大西君は興味持つと思うから・・」それって、どういうタイプ？と思ったのですが、それよりもなにか朦朧とした不安な気持ちになったのを今でも覚えています。「え、興味持つって、、じゃあ、どうするのがいいの？」そう訊くと、「・・どうもしないのがいいの。じっと普通にしてるとそのうち興味示さなくなるから」『・・そうかぁ、なんか、憑き物みたいなものかな』とだけ思いましたが駆除する為のいい方法を聞いたとは思えませんでした。

それからしばらくするうちに記憶も薄れて大学院の授業が始まり、技材の研究室での初日、二年生のアトリエの方から青いつなぎを着て、鼻歌まじりに私を横目で見ながら通り過ぎる、いかにもおおざっぱな感じのする色の黒い青年がありました。初めてでしたが大西君と分かりました。目が合った瞬間に、いけないっ、と思いました。目が合ったのがいけないのではない、いけなかったのはその時に思わず目をそらしてしまった事です。「見られても目をそらすとかしちゃだめ。ますます興味持つから」と云われていたのを思い出しました。これが私と大西君の出会いでした。

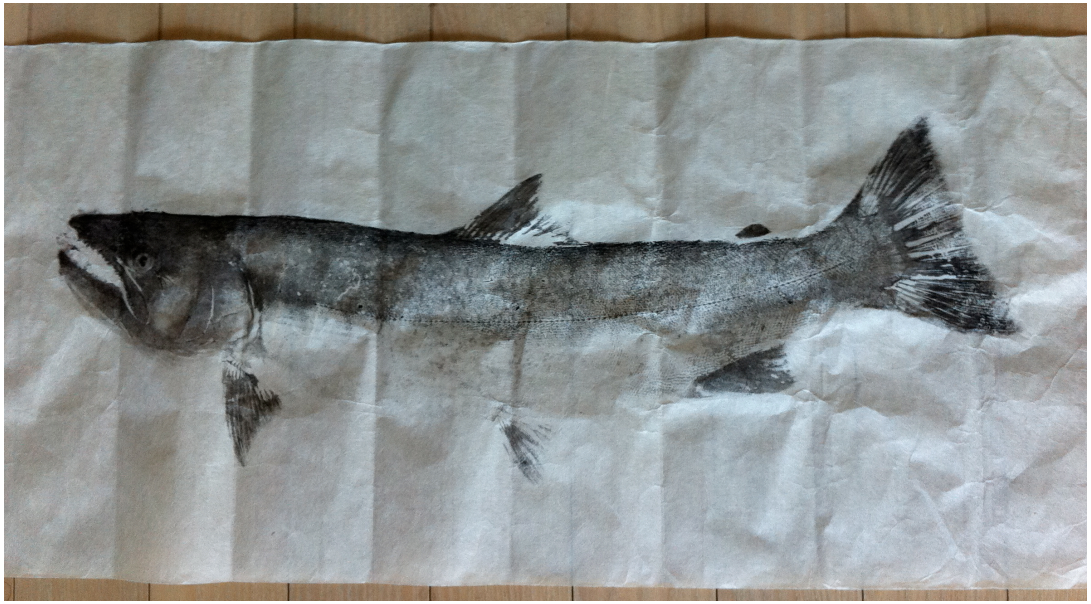
大西君は研究室で最初は何かと妙に親切で、いいひとでした。私がテンペラ用の金箔地を作っていると覗き込むように、「おぉ、ピカピカだね、言い値で買ってやるよ。」そう云うと細い目をもっと細くしてカラカラと笑うので、言い値を云うと、即金で払うと云います。いいひとでした。でも払いがいいのは始めだけで、その後は値切られて、払いは中世の教会並に悪いし、、「それってさぁ、大西のいつもの手だよ」と云われて、そうかぁ、と知ったときは遅く、逆に大西君から色々と買わされてしまっていました。気がついたらくいものにされてしまっていたようです。とはいっても元々可成り高い画材を安価で買ったと思って居ます。勧められるままにフランス製地塗り材のリトポンとムードンを百

キロ程買わされて頂きました。大西君は院を修了後も一郎研究室に研究生として残ったので、私がドイツの国費留学生として日本を発つまでこんな感じでずっと一緒でした。その時はドイツに行ってからも縁が続くとは思っていませんでしたけど、、。渡独後、使い切れずにあまりにあまったリトポンとムードンの消息は、「赤木ぃ、お前の置き土産は技材で有り難く使わせて貰ったよぉ」とカラカラという笑い声と一緒に電話越しに聞きました。その声を聞いて一瞬、ぽっと窓硝子越のミュンヘンが曇りました。泣いたのです。

それからも私は大西君がドイツに留学するのを手伝わされたり、受け入れ先のニュールンベルクのプロフェッサーに手紙を書かされたり、ドイツに来たら来たでまた大変で、部屋探しに家具探し、「親友だろ、おなごを口説くのを手伝え」と云われたり、云う通りにしたら、「もういいからお前はミュンヘンに帰れ」とかも云われたり、色々な事が有りました。書きませんでしたが、気が短い私は可成り本気で喧嘩もしました。口をきかない私に最初に話しかけるのはいつも大西君の方でした。私がむっとしていると大西がカラカラと笑います。カラカラ笑いながら機嫌を取るように、でも、少し嫌がらせをしながら話しかけてきます。私もそのうち普段通りに話し始めていました。

国立大学法人 横浜国立大学教授 画家　赤木範陸

「これは名誉ある釣り師にしかやらないんだけど、お前は金箔とか光るのが好きだから特別にやる」といって呉れた、大西作のキングフィッシャーのバッチ。純銀製?、と云っていた。

大西が「これは世界で二番目のレコードなんだ。スペシャルにお前にやる」と自慢して呉れた魚拓。なんの魚か忘れました。鮭ではないらしい。
「目が生きているみたいで、凄いぞ。」
と云うと「そ、れ、はぁ、俺が描いたんだぁ、、」
といって笑いながら怒った。本人が云うには兎に角すごいらしい。

大西博追悼集所載